

2015 年度
社会医学研究会
活動報告書

はじめのお言葉

奈良県立医科大学小児科教授

社会医学研究会 顧問

嶋 緑倫 教授

社会医学研究会（社医研）は主にボランティア活動と国際交流活動とに大別されます。2015年度もこの活動報告を読んでいただければわかるように社医研の活動は多岐にわたりそして活発だったと思います。

ボランティア活動としてはこれまで活動してきた障害を持つ子供や家族を支援するみのむしの会、終末期の患者が過ごすホスピスにおけるボランティア、保育園でのボランティア活動に加えて、昨年度は奈良県立医大小児センターでの学習支援ボランティアも開始されました。入院している小学生や中学生は院内学級で義務教育を受けられますが、高校生は盲点で、これまで全く教育支援が行われていませんでした。この社医研の支援活動はきわめて斬新であり、報道にも取り上げられ注目されました。また、活動成果を第36回近畿小児血液がん学会でも発表され、大きな反響を呼びました。奈良医大社医研の活動の幅がますます広がり、そして、地道な日々の活動が社会にも影響を与えうる原動力になることは非常に素晴らしいことだと思います。ボランティア活動は初め何を話して何をすればいいのかわからず戸惑うことも多いかと思いますが、あせらず継続することがとても重要だと思います。そのうちにきっと、皆さんの活動が何らかの化学反応を起こし今まで経験したことがないような達成感を得られることになると思います。まずは現場に飛び込んで、どんどん体験することです。そして、社医研のボランティア活動をきっかけに医療や教育保育など患者、家族、子供を取り巻く現状や課題にも目を向けて仲間で議論し理解を深めてほしいと思います。この体験が、きっと、患者のマインドを理解できる「よき医療人」に結びつくものと思います。

もうひとつの重要な活動が国際交流です。毎年、社医研は交換留学生を受け入れています。海外の学生とコミュニケーションをとってお互いを理解しあうことは貴重な体験になると思います。もちろんみずから留学生として海外の医療現場を体験することも是非勧めたいと思います。これまで、社医研の多くの先輩が体験してきました。これからは海外の人と対等に交流できる国際的センスを持った医療従事者が求められています。社医研から高いボランティア精神を持ち国際力のある人材がどんどん巣立っていくことを心から願っています。

みのむしの会

医学科 3年 植田 駿

みのむしの会は、毎月 1 回日曜日にやることが多いです。場所は主に東生駒の社会福祉センターで開催されます。みのむしの会は障害を持つお子さんとそのご家族のための会であり、奈良医大生はそこにお邪魔させていただき、子供たちと遊んだり、ご家族の話を聞かせてもらったりしています。

年一回、生駒山麓公園にてみのむしキャンプがあります。そこでは、子供たちと一緒に遊ぶほかに、一緒にお風呂に入ったり、ご家族の方と一緒に食事をして、お話しします。

みのむしの会には今年から参加しております、その都度いろいろと学ばしてもらっています。

ここで学んだことで、最も重要だと思っていることは、子供はたとえ障害を持っていたとしても、やっぱり子供であるということです。

医学部の教育では基本的に、発達障害などを座学で学びます。たとえば、13 番目の染色体が一番多いとか、コミュニケーション能力に問題があるとか、そういったことを教室で学ぶわけです。

授業で学ぶことは、障害についてですから、言い換えると、健康な人とは違う点を学び続けるわけで、こういう授業を、実際の子供たちを見ずに受け続けると、障害をもつ子供が、なんだか特殊な人に見えてくるように思います。

なので、最初にみのむしの会にいった時は、どう接すればいいか分からなかったです。障害をもつ子供がどういう人なのかあまりわからなかったのです。

しかしながら、実際に遊んだり、話したりすると、そういった疑問は無くなりました。

ちょっと癖はあるけれど、やはり普通の子供なのです。普通に遊ぶし、普通にすねたりします。

こういった実感は、やはり実際に障害を持つ子供と接しないとわからないものでしょう。

みのむしの会で、子供と実際に接する機会をいただいて、本当にありがたく思います。

これからも、みのむしの会に参加し、いろいろと学んでいきたいと思っています。

ホスピスボランティア

医学科3年 中森 滉二

ホスピスボランティアは田原本にある国保中央病院の緩和ケア病棟『飛鳥』で月に一度のペースで活動を行っています。ホスピスとは治療が困難となった終末期の患者さんをひとりの人間として尊重し、人生の質(QOL)を維持・向上させるための施設です。ホスピスでは患者さんが残された時間をゆったりと過ごせるような空間が作られています。

病院という施設では、患者さんと家族以外は医療の専門家です。そのような日常生活からかけ離れた空間では、患者さんは医療者の想像以上の緊張を抱えています。そこに”適度に素人な人”としてボランティアがいれば、ささやかなことしかしてなくても、患者さんに安心感を与えることができると考えて活動をしています。

私たちは学生ボランティアとして、ホスピスが患者さんにとってより過ごしやすい空間となるようにお手伝いをさせていただいています。具体的な活動としては、リビングルームの大きな窓に季節ごとの飾り付けをしています。春には桜、夏には海水浴、秋には紅葉やハロウィン、冬にはクリスマスやお正月、節分などの飾り付けをしました。患者さんやそのご家族の方から『かわいい飾り付けやね。』などと褒めていただくこともやりがいを感じます。また、飾り付け押ししている最中に患者さんとお話をすることがあります。患者さんの方から話しかけてくださり、私たちから特別なアプローチをしなくても患者さんの話を聞くだけで、その方に感謝されることもありました。

8月にはホスピスの夏祭りのお手伝いもさせて頂きました。この夏祭りはホスピスに入所している患者さんとそのご家族の方々を対象に、ホスピスの中庭やホールで様々な催し物が開かれます。

医療者自信のメメント・モリ（死を想うこと）や、いのちとは？という問いかけは、医療という科学の分野に留まらず、文化的、宗教的、社会的学びへと広がります。その広がる学びがあつてこそ、私たちは厳しい臨床の現場をひとつひとつ大切に抱えながら、病む人と家族をケアし、自分自身も燃え尽きないで働き続けられる強さを身に付けられるのではないのでしょうか？これらを体験し、学ぶ手段の一つがホスピスボランティアだと思い、私は活動に参加しています。

ホスピスボランティアでは月の初めに参加希望者の予定を聞き、それに合わせてできるだけ多くの方が参加できるように活動日を決めています。少しでも興味のある方は、是非参加してみてください。

ぬいぐるみ病院ボランティア

医学科 2年 潮見 吉紀

活動日時：2015年8月25日（火）

活動場所：ひかり保育園

活動を終えての感想：今年は、「手洗いうがいをしよう」と「すききらいなく食べよう」の二つをテーマにして活動を行いました。お医者さんごっこの最後に、園児とお医者さんとのお約束で、「手洗いうがい」を家に帰ってから、そしてご飯を食べる前にしっかりとすることと、「すききらいなく食べる」ことを伝えました。また「すききらいなく食べる」ことをテーマにした人形劇を行い、手洗いのやり方も一緒にやりながら指導しました。園児達が楽しくこれらを学んだことで、家に帰ってから、また活動後もずっと、積極的に「手洗いうがい」や「すききらいなく食べる」ことを続けてくれたら嬉しく思います。活動後に園児達がどうしているかは分からないのですが、親御さんや保育園の先生方がこの活動をきっかけにして、これらの大切さを子ども達に伝えていただければと思います。全体を通して問題も起きず、楽しく活動を終えることができよかったです。

学祭 模擬店

医学科 2年 安達 有博

今年も社医研は10/31、11/1と開催された白樺生祭で模擬店を出店いたしました。その際、責任者をさせていただいた医学科2年の安達有博と申します。

今年の模擬店の出店内容は「焼きおにぎり」です。去年、こんなものが欲しかったなどのことを話し合った結果決めた内容でしたが、正直どれだけ売れるか全く自身がありませんでした。しかし、めでたく2日目の半ばには焼きおにぎりは完売し利益もしっかり出すことができました。本当にこのように模擬店がうまくいったのは、とても協力してくれた同学年のメンバーや当日手伝ってくださった方々のおかげだと思います。とてもありがたく思っています。

僕自身、このように、多く売るため、利益を出すため、どこで材料を買いどんな値段設定をすればいいのか考えるという経験はしたことがなく、とても新鮮な経験でした。模擬店の準備以外にも、部活の用事などもあり、学祭前はとても忙しかったです。その忙しかった分だけ、なんとかやり終えた時、大きな達成感がありました。今回の模擬店は、忙しかったのですが、貴重な経験をすることができ、責任者という立場をやらせていただけて良かったと思います。

なかよし保育園ボランティア

医学科 5年 大西 里奈

大学近くのなかよし保育園にて、親御さんが迎えに来られるまで、園児の安全に気をつけながら一緒に遊ぶボランティア活動を行っている。ボランティアを行うのは平日の授業、実習等が終わった 16 時半頃から 19 時頃までである。各自の都合に合わせて日程を決めて取り組むことができるので、他の部活やバイト、学習等で時間が取りづらい部員も比較的参加

しやすい。

日常生活の中で子どもと触れ合う機会はあまりなく、このボランティアを通じて子どもとの接し方を実体験から学ぶことができる。それに加えて、相手の目線に合わせて話すといった、医療者として大切なことを学ぶことができていると感じている。

活動における課題として、各部員がいつでも参加できる体制にしていることから、代表と施設との調整に手間がかかることが挙げられる。また施設側の要望を取り入れた体制ではないため、本来のボランティア活動の意義を成していないところが大きな問題点である。今後もボランティア活動として継続していく場合は、日程や時間などの施設側の要望を聴取し、可能な限り実践できるような体制を整える必要があると感じている。

IFMSA

医学科 3年 中尾 美穂

・ IFMSA

IFMSA(International Federation of Medical students' Associations)は、1951 年に設立された非営利の国連 NGO で、世界保健機関(WHO)により医学生の国際フォーラムとして公認されています。

2015 年 3 月現在、約 100 ヶ国に上る加盟国を有する世界最大学生団体です。

IFMSAWebsite:<http://www.ifmsa.org>

・ SCOPE/SCORE

SCOPE、SCORE は IFMSA にある 6 つの常設委員会のひとつで、以下の略称です。

SCOPE: Standing Committee on Professional Exchange 臨床交換留学に関する委員会

SCORE: Standing Committees on Research Exchange 基礎交換留学に関する委員会

SCOPE は毎年約 8,000 人の医学生が海外の医科大学、医学部、大学病院等において 4 週間の医学研修と交流プログラムへの参加および、他国からの留学生受け入れを行っています。

SCORE は、海外の大学の医学部、研究所で基礎研究交換留学をしたいという医学生の希

望を実現するため、1992年に設立されました。現在、50カ国を超える国の中で、毎年約2,000人以上の医学生が医学研究交換留学に参加しています。

・LEO/LORE

LEO:Local Exchange Officer

LORE:Local Officer on Research Exchange

各大学からの留学生の募集、海外からの留学生の受け入れにおいて各大学における実務を担当するのがLEO/LOREです。LEO/LOREは大学を代表して、大学・留学生との橋渡し役です。

・目的

IFMSA 加盟国での医学研修および医学生との交流、また他国からの留学生受け入れを通じて将来の医師としての活動に備えた国際的な視野を持つ優れた人格を形成すること。

・内容

海外の医科大学、医学部、大学病院・研究施設等において原則4週間の臨床・研究研修と交流プログラムへの参加および、他国からの留学生の受け入れ。

★2015-2016 活動報告

2015/08にイタリア人1名、ポルトガル人1名の医学生を受け入れました。精神科で1ヶ月間お世話になりました。その間、奈良医大の医学科・看護科の学生の家にホームステイし、互いの国の文化や習慣、さらには医療について学び、国際的視点をもつことができました。休日には多くの奈良医大生、地域の方と交流や観光・文化体験をしました。

Outgoing 希望の奈良医大生の手続きも行い、海外の医科大学と話を進めています。

小児科学習支援ボランティア

医学科5年 大西 里奈

本大学付属病院では、長期間入院する小学生および中学生を対象とした院内学級を設置しており、学習やレクリエーションを行っている。しかし高校生に対する支援体制は整っておらず、入院中の高校生は自身で学習を進めるほかなく、支援の不十分さが指摘されていた。そこで社会医学研究会では、入院する高校生に対して病室で学習支援をするボランティア活動を平成26年度より開始した。活動内容と今後の課題について報告する。

【活動概要】

平成 26 年 5 月ごろに、当時小児科に入院していた高校 1 年生の患者に対して、復学支援を目的として学習支援ボランティアを開始した。メンバーは本部活部員 6 名で、各自担当教科を決め、週に 2 から 3 回程度、患者の体調と相談しながら支援を行った。患者は退院後、1 つ下の学年に復学することとなった。

第 2 期として、平成 27 年 6 月ごろより再度ボランティアを開始した。支援を希望した患者は高校 1 年生 2 名、高校 3 年生 1 名であった。メンバーは本部活部員 5 名で、週の初めにその週の担当日を決めて、1 回あたり 1 時間から 2 時間で支援を行った。支援内容は各患者の希望に合わせて個別に調整し、各教科の問題解説や在籍校の教科書を使った授業を行った。退院後は、2 名は単位が認められて在籍学年に復学し、1 名は休学ののちに在籍校へ復学することとなった。

学生は病室への入室前に体温、感冒症状の有無を専用の記録用紙に記載し、マスクを着用することを義務付け、患者の感染予防を徹底した。代表学生は病棟スタッフおよび患者の主治医と連携し、その日の患者の体調やスケジュールについて連絡を取り合いながら支援を進めた。

【今後の課題】

支援を希望する入院患者に対して学生数が少なく、担当学生の 1 人当たりの負担が大きくなった。また病棟スタッフと学生との情報共有の手段が課題となった。支援者、患児、および連携する病棟スタッフすべてが無理なく支援に関われるような体制を整えることが必要である。一方で学生による支援には限界があり、小中学生と同様の継続した支援が行われるような働きかけを県に対して行っていくことが必要である。

花の家ボランティア

医学科 3 年 堀江きよみ

「花の家」は近鉄橿原線の橿原神宮前駅の近くにあるデイサービス施設で、私たちは主に土曜日に参加者さんの都合の良い日・時間帯でお邪魔させていただいています。花の家の利用者さんはご高齢の方が中心で、施設の中は一般の方のお部屋と認知症を持っていてより見守りの必要な方のためのお部屋の 2 つに分かれています。私たちの活動内容は、その利用者さんとおしゃべりを楽しんだり、パズルやトランプで遊んだり、一緒に貼り絵のカレンダーを作ったり、麻雀などのゲームをしたりと非常に和やかなものです。お昼には利用者さんと一緒に美味しいお昼ご飯をいただきます。

花の家ボランティアは今から 5 年前に、地域健康医学政策教室教授の車谷典男先生や当時、橿原市役所 橿原市民協働課 課長補佐でいらした辰井保千代さん、花の家所長の濱田しま子さんをはじめとした多くの方のご協力・ご厚意により生まれ、奈良医大に通う学生

として、地域の方との関わりを深めてもらえればという想いが込められているそうです。

今年度は私はあまり活動に参加できていませんでしたが、花の家に行くときはいつも認知症の方のお部屋にお邪魔させていただいています。そこでもやはりおしゃべりやトランプを楽しんでいるのですが、認知症の重い方だと朝に私が自己紹介して、たくさんお喋りをして、帰る頃には誰だったかわからなくなったりされていることもありました。それでは甲斐がないのではと思う方もいらっしゃるかもしれません。でも、例え昨日のことを忘れてしまっている、今日を、今を楽しく生きることはその人にとって大切なことに違いありません。(笑うことは免疫活性を上昇させるとも言いますし。) 学生ボランティアとして大きなことはできなくても、少しでも目の前の人に笑顔を運ぶことができれば…と花の家に限らず、社会医学研究会の活動全体を通して願っております。

AMSA 活動報告

医学科 3 年 倉岡大希

◆AMSA とは？

1985 年に AMSA (アジア医学生連絡協議会、Asian Medical Students' Association) は正式に発足され、現在では 22 の国・地域 (オーストラリア、バングラデッシュ、カンボジア、香港、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、台湾、タイ、パプアニューギニア、イギリス、中国、ネパール、モンゴル、ニュージーランド、トルコ etc) が参加しています。アジア各国の医学生と共にアジアの保健医療の向上を目指し、ヒューマンネットワークを作りあげていくことを目標としています。主な活動としては年に 2 回の国際会議や交換留学を行っています。

AMSA Japan もその支部の 1 つであり、独自に国内交流会、会議の報告会、他団体との共催イベント、新歓、追いコンを行っています。

◆2014 年 12 月から 2015 年 12 月までの主なイベント活動

1. EAMSC(東アジア医学生会議) in Indonesia

2015 年 1/10~1/15 の日程で、インドネシアにおいて第 28 回東アジア医学生会議が開催されました。『Sexually Transmitted Infections: Halt the Disease, Help The People』というタイトルで、アジアを中心に多国籍の医学生が一堂に会し、基調講演、プレゼンテーション、ディスカッションなどのプログラムを通じて性感染症に対する理解を深めました。また、観光や文化交流のプログラムを通して、他国の医学生との交流を深めることが出来ました。

2. 新入生歓迎イベント

2015 年度は、東北・関東新歓(@東京女子医科大学)、関西新歓(@京都大学)、中国・四国

新歓(@岡山大学)、九州新歓(@九州大学) が行われました。

3. 春の国内交流会

6/20～6/21 に、鳥取大学において春の国内交流会が開催されました。このイベントは、AMSA Japan の目玉イベントである国内の医療系学生を対象とした交流会であり、テーマに沿った講演、ワークショップ等を行うとともに、全国の医療系学生間の交流を図りました。今回は初めての鳥取大学での開催となり、テーマとしては「Non-verbal Communication」を掲げました。小テーマとしては鳥取県で積極的に取り組まれている「医療手話」や「終末期ケア」として、2人の講師の先生をお招きし、参加者はこの講師の先生によるご講演、そしてワークショップを通して、上のテーマに関して学びを深めました。

4. AMSC(アジア医学生会議) in Singapore

7/5～7/12 の日程で、シンガポールにおいてアジア医学生会議が開催されました。『Geriatric Medicine : Embracing the Silver Tsunami』というタイトルで、老年医学について学びました。アジアを中心に20カ国から438名の医学生が参加し、14名の日本人医学生が会議に赴きました。参加者は、基調講演やグループメートとのディスカッション等を通じて老年医学への理解を深めるとともに、観光などの文化交流プログラムを通じて、アジア各国の医学生との交流を深めました。

5. 秋の国内交流会

12/5～12/6 に、東京女子医科大学において秋の国内交流会が開催されました。今回のテーマは『見直して Meal』ものでした。参加者は3つのワークショップと、管理栄養士の先生による講演によって構成され、食に関する学びを深めました。全国各地から医学生が参加して、テーマに関して活発に議論が行われ、また懇親会等を通じて医学生同士の交流を深めることが出来ました。

あとがき

医学科 3年 藤井 卓也

本年度の活動報告書の作成に伴い、例年と同様に各活動代表の方々にご執筆をお願いすることになりました。皆様方快く引き受けて下さり、実にありがとうございました。こうして毎年の活動を纏めることにより、平素よりお世話になっております嶋教授、OBOGの先輩方にご報告、ならび学生にも他の活動状況をお知らせすることが出来る良いきっかけとなっていると考えております。

社会医学研究会は多くの活動を有するため、本人の自由に様々な活動を行なっていくことが出来る部活です。活動の多くは学生のみだけでなく地域社会の方々、例えば花の家であればデイサービスのスタッフさんや通所者さん方、みのむしの会であれば奈良医大 OBの箕輪先生、田口先生、ならびに普段の運動療法に従事するスタッフの皆様方、参加者のご家族方等、地域の活動に参加させていただく形式です。こうした活動の中で、地域医療の実情を聞くことが出来たり、実際の現場を拝見したり、大学の講義の中だけでは得られないものを経験することが出来ます。また本年度からみのむしの会や、ホスピスボランティア等一部の活動において、奈良県総合医療センター付属の看護学生(以下：奈良看護生)も参加するようになりました。活動の中で様々な話をし、学生間での多職種への理解を深め、一方で地域社会との関係を築くことが出来る。社会医学研究会の名前にもある様に、学生は活動に参加する中で社会医学を学び、より深く知る部活になってまいりました。

本年度は諸事情により、手話の会、てくてくの会は休会となっておりますが、手話の会は近年新たな活動代表に引き継がれ、来年度から活発に活動が行われていくと感じております。てくてくの会は現時点では再開の目処は立っておりませんが、今後とも継続し、後輩達に参加してほしい活動の一つだと感じております。

今年度は10名もの先輩が卒業されることとなり、大変寂しく感じております。先輩方が学生のうちに築いてきた地盤を今年度入部した12名の新生生をはじめ、部員全体で社会医学研究会の伝統を受け継ぎ、学生間のみならず奈良県の方々とも交流し、更なる発展を願い、今後とも精進してまいりたい所存です。

昨年度同様、今年度も東洋医学研究会やNLSC、NARA will等の勉強系の活動で協力し新生生への合同説明会が開催されました。医大で行なわれる様々な活動を知り、好奇心を持つのは新生生だけでなく、他の活動に所属していない各活動の学生もです。その中で互いの活動に参加し、より協力して互いを高めあう様になっていけば、と感じる次第です。

私はこの1年間、兼部している部活動のため、1, 2年生の時のように様々な活動に参加することが出来ず、多くの活動の1年間を報告書を読ませて頂く中で頭の中で思い浮かべております。1年間活動に参加しないだけでも取り巻く環境や参加者の皆様方等、状況が移

り変わっていきますので、2016年度の落ち着いた頃には気持ちを一新して、活動に初めて参加する姿勢で臨んでまいりたいと思います。まだまだ社会医学研究会でしていきたいことばかりで、皆様と共に活動に参加していきたいです。未熟な面も多々ありますが、今後ともよろしくお願ひ致します。

最後に社医研の活動を運営するにあたり、嶋教授はじめ OBOG の先生方、先輩方、副部長の中森、同額、後輩の皆様にお力添えいただき、この1年間を送ることが出来ました。皆様方、ご協力して下さりにはいつも感謝しております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します。